

国内経済情勢

概観

中小企業の設備投資は引続き停滞気味であり、住宅投資も低水準に推移している。一方、個人消費は夏物季節商品やレジャー支出を中心に緩やかながら回復の方向にあり、輸出は根強い増勢を続けている。この間、大企業の設備投資はひとところより増勢は鈍ってはいるが、製造業中心に堅調な動きを維持している。こうした中で、素材関連メーカーの生産態度は引続き抑制的であり、在庫調整は跛行性を伴いながらも着実に進展をみている。

56年度上期の主要企業(製造業)の収益は大幅欠損を示した石油精製を除けば全体として前期並みの水準を確保し得る見通しとなっており、先行き下期にかけては増益が期待されている。

8月の商品市況は、石油製品が減産効果に支えられて続騰し、一部官公需関連資材も荷動き回復を映じて強含んだものの、大勢としてみると、夏季休暇による商内閑散期とあっておおむね保合い商状に推移した。この間、卸売物価は、石油製品の値上げに加え為替円安も響き小幅ながら上昇した。一方、消費者物価(東京)は生鮮食品や被服の値下りを主因に下落し、前年比上昇率も3%台に低下した。

金融面では、7月のマネーサプライは前月に比し前年比伸び率を高めたが、基調としては安定し

た動きを続けている。また、7月の全国銀行貸出約定平均金利は前月に続き低下した。

7月の国際収支をみると、輸入が前月落込みの反動から増加を示したため、経常収支(貿易収支季節調整後)黒字幅が縮小し、長期資本収支も対外証券投資を中心に引続き大幅な流出超となったため、総合収支では4か月連続の赤字を記録した。8月の為替相場は、前月来の米ドル高地合いを受けて月初円安化したが、その後市場に米ドル高行過ぎに対する警戒観が台頭したこともあってやや円高方向に戻している。

生産、出荷とも増加

7月の鉱工業生産(季節調整済み、前月比*、速報)は0.5%の増加となり(前月+2.6%)、同出荷(速報)も+1.6%と前月(+2.2%)に続き増加した。このため生産者製品在庫(速報)は-1.4%と減少した(前月+1.3%)。

* 以下増減率は特に断わらない限り、前月比または前期比(物価を除き季節調整済み)。

財別生産、出荷の特徴をみると、一般資本財は製造設備関連機器(化学機械、金属加工機械)や事務合理化関連機器(電子計算機、事務用機械)等を中心に生産、出荷とも増加し、消費財も本格的暑気の到来からエアコンの出荷が著増したほか、ステレオ、VTRの生産、出荷もかなりの増加を示した。また資本財輸送機械(小型自動車、船舶等)や建設財(セメント、板ガラス等)の生産、出荷も前月に続き増加した。この間、生産財(非鉄、石油製品、化学肥料等)の生産は微減した。

一方、素材関連の製品在庫の動きをみると、石油製品が減産強化や値上げ見越しの手当増から大幅減少となったほか、メーカーの減産態勢維持を背景に紙類(上質紙、板紙)、綿糸等多くの品目で在庫減少をみており、また一部建設関連財(アルミサッシ、鉄筋コンクリート管)では出荷増を主因とする在庫調整の進捗がみられた。ちなみに8月時点調査の日本銀行「短期経済観測」によれば、石油精製、紙パ等では在庫過剰感がなお根強く残っているが、大方の業種では荷もたれ感が漸次後退をみている。

国内最終需要の動向をみると、まず設備投資関係では、7月の機械受注(船舶・電力を除く民需)は3.2%の増加となった(4~6月-1.6%)。一方、7月の建設工事受注額(民間分、速報)は4~6月増加(+8.1%)のあと-11.9%と落込んだ。なお、上記「短観」対象企業の56年度設備投資計画は、主要企業製造業で+12.8%と堅調な伸びを見込んでいる一方、中小企業製造業では、前回調査比若干上方修正されたものの、依然16.1%の減少見込みとなっている。

7月の全国百貨店売上高(通産省調べ、前年比、速報)は暑気到来に伴う夏物季節商品の持直しを主因に+7.7%(前月+4.8%)と伸びを高めた。もっとも、8月に入ってから都内百貨店売上高は秋物衣料の出足低調等からやや伸び悩んでいる模様である。耐久消費財の売行きをみると、8月の乗用車新車登録台数(除く軽、前年比、速報)はモデルチェンジを挺子としたディーラーの拡販努力もあって+2.2%と久方ぶりに前年水準を上回った(4~6月-2.2%)。一方、7月の家電製品は天候回復からエアコン、扇風機等夏物商品を中心に好伸した。また、消費動向調査(4~6月)によ

れば、レジャー・娯楽費は持直し傾向にある。

7月の新設住宅着工戸数(前年比、速報)は、-16.7%と大幅な落込みを示した(4~6月-4.1%)。

雇用情勢をみると、7月の有効求人倍率は0.69倍(前月0.66倍)と幾分上昇し、また完全失業率も2.21%と前月(2.29%)に続き低下した。この間、常用雇用は-0.1%とわずかながら減少した(4~6月+0.3%)。

なお、上記「短観」によると、56年度上期の企業収益(製造業、経常利益)は石油精製が欠損見通しであるのを除けば前期並みの水準を確保しうる見込み(前期比+2.9%)となっており、また下期については市況回復期待もあってかなりの増益(同+15.4%)が期待されている。こうした収益見通し等を背景に、企業の業況判断は先行き年末にかけて素材業種を中心に回復期待感を強めている。

消費者物価の前年比上昇率は3%台に低下

8月の商品市況をみると、メーカーの減産態勢維持を背景に石油製品が続伸し、一部官公需関連資材(型枠用合板、コンクリートパイル)も荷動き回復を映じて強含みに推移したが、他方で棒鋼、形鋼、綿糸等主力商品が小反落を示すなど、大勢としてみると夏季休暇による商内閑散もありおおむね保合い商状に推移した。

8月の卸売物価は、ガソリン等民生用石油製品の値上りに加え、為替円安の影響もあって+0.5%と続騰した(前月+0.4%)。

8月の消費者物価(東京、速報、55年基準)は、夏物衣料のバーゲンや野菜の値下りを主因に-1.0%と続落した(前月-0.3%)。なお、前年比上昇率では+3.7%と54年9月以来約2年ぶりの4%

台割れとなり、生鮮食品を除くベースでも +3.5% (前月 +3.6%) と着実な低下を示している。

貸出金利は小幅低下

8月の金融市場をみると、銀行券は997億円の還収超(前年同1,778億円)となり、月中の平均発行残高(前年比)は+5.0%と引続き伸び率を高めた(前月+4.3%)。一方、財政資金は源泉徴収税を中心に税揚げがかさんだものの、国債発行額の大幅圧縮や資金運用部による対市中売戻条件付国債買入の実施等から、1,332億円の払超(前年10,416億円の揚超)となり、この結果8月としては異例の資金余剰(2,412億円)となった(前年9,595億円の資金不足)。日本銀行は売出手形の実施等でこれを調整した。

この間、コールレート(無条件物)は上記のような資金余剰地合いを映じて弱含みに推移し、月中では0.0625%低下、7.25%で越月した。一方、手形売買レート(2ヵ月物)は、円相場の反発に加え季節的資金余剰期を控え金利先高観が後退したため弱含みに推移し、月中0.125~0.0625%の下落となった(月末7.375~7.4375%)。

7月のマネーサプライの伸び率($M_2 + CD$ 平残、前年比)は9.0%と前月に続き伸びを高めた(5月+7.5%、6月+8.3%)が、これは前年の伸びが低かったこと等によるもので、基調としては引続き安定的な動きを示している。一方、7月の全国銀行貸出約定平均金利は-0.033%と小幅ながら引続き低下した(前月-0.091%)。この間、上記「短観」によると金融機関の貸出態度は引続き緩和の方向にあり、また企業の資金繰りも跛行性はあるものの総じてみれば順便に推移している。

8月の公社債市況は、月前半一進一退の動きを

示していたが、月央以降は国債等の発行条件改訂問題や米国債券市況の急落が投資家の買控えを強め、弱含みに推移した。なお、当月は非市場性国債がはじめて発行された(償還期限6年、応募者利回り8.287%)。一方、株式市況は、円相場反発に伴う外人買い再燃期待から月央まで上伸したが、その後は信用規制の強化やニューヨーク株式市況の下落から全般に調整色を強めた(東証指数月末589.44、月中-2.71)。

為替相場は円高化

7月の輸出(通関、ドルベース)は+4.0%と前2ヵ月減少のあと増加し、数量ベースでも+2.6%となった。品目別(ドルベース)には、鉄鋼が前月に続き減少したものの合繊維物等繊維製品が増加、また船舶も引渡し集中から著増した。

一方、輸入(通関、ドルベース)も+7.5%と前3ヵ月減少のあと増加し、数量ベースでも+5.7%となった。品目別(ドルベース)には、鉄鉱石、石炭がかなりの減少となったものの、原油が前月大幅減の反動もあって増加したほか、小麦、砂糖等食料品も数量増を主因に増加した。

7月の国際収支は、上記輸出入動向を映じて貿易収支(季節調整後)が1,632百万ドルの黒字(前月同2,158百万ドル)となり、経常収支(貿易収支季節調整後)も147百万ドルと小幅ながら4ヵ月連続の黒字を記録した(前月同890百万ドル)。もっとも、長期資本収支は、対外証券投資の高水準持続や円借款供与の増加などから本邦資本が引続き大幅な流出をみたため全体で1,437百万ドルの大幅流出超となり、総合収支では781百万ドルと4ヵ月連続の赤字となった(前月同954百万ドル)。

8月の為替市場をみると、月初は前月来の米ド

ル高地合いをうけて円安となったが、その後市場 75銭、月中11円の円高)。
に米ドル高行過ぎに対する警戒観が台頭したこと (昭和56年9月11日)
もあってやや円高方向に戻している(月末 228 円